

スタートアップ深層 ～ 世界が注目する理由に迫る ～



神経科学に基づき
「香り」を製造



個人向けの
「空飛ぶクルマ」を開発

毎年 1000 社近いスタートアップ企業が誕生するイスラエル。革新的な技術やプロダクトを生み出し、世界から注目を集めているスタートアップの中から今回、Moodify と AIR の 2 社に創業過程や事業戦略、今後の展望、さらには日本市場への思いや本音を聞いた。

1.

Moodify

Mr. Yigal Shalon

CEO

「香り」×「心理学」で人々の心を動かす

人間の鼻は、外部からの刺激を直接脳の辺縁系に伝える唯一の感覚器官だ。

ゆえに、嗅覚が人間の心理に与える影響は非常に大きい。

Moodify 社は、ワイツマン科学研究所における 10 年以上の研究に基づき「香り」を用いて人々の幸福感や生活の安全性を高める製品を開発している。



今回、同社の CEO である Yigal Shalon 氏に取材を行った。

心理学を学び、ビジネス経験を積んだのちに起業

Shalon 氏はヘブライ大学で心理学を学んだのち、認知行動療法の修士号を取得した。

その後は PE ファンドや政府機関で約 20 年ビジネスの経験を積み、2013 年に認知行動療法の特別スクールを開設し、再び心理学の世界に戻ってきた。

そこで出会った教え子であり心理物理学者である Yaniv Mama 氏とともに、2015 年に同社を設立した。

神経科学に基づいて「香り」を生成

同社は現在、主に3つの製品を開発している。

Moodify White は、嗅覚における「ノイズキャンセリング」のような働きをするもので、部屋の壁に掛けるだけで不快な匂いをブロックすることができる。この製品は、ペットを飼っている家庭向けに既に販売されており、悪臭に対抗して分解する分子を設計するこの技術を応用し、車内のタバコの匂いを除去するための製品の開発なども進められている。

Moodify Blue は、嗅覚を通じて人々に心理的影響を与えるもので、ストレス緩和や睡眠の質の向上に効果があり、リラックス効果のある食品や、精神安定剤の代用品となりえる。

Moodify Red は、安全のため、注意力を高めるものである。この製品は、居眠り運転の防止のために自動車メーカーと共同開発しているもので、ワサビのような香りを放出させることによって、眠気を覚ますことができる。

従来、香りの生成は感覚に基づいて行われていた。一方同社は、脳が香りを認識し、それらが心理的効果を及ぼす神経機構に基づいて香りを生成するため、より心理的効果の高い香りの生成が可能であるという点が同社の最大の強みであるといえる。



Yigal Sharon 氏

CEO から日本企業に向けたメッセージ

当社は、設立初期から日本の投資家により出資を受けており、日本とは非常に特別な関係にあります。

また、日本市場への進出も目指しており、フランチャイズ契約ができる方や企業を探しています。

2.

AIR

Mr. Rani Plaut

CEO

個人向けの「空飛ぶクルマ」

近年、「空飛ぶクルマ」を開発するスタートアップ企業の数が増えている。それらの多くが法人向け・商用向けであり、個人が利用するために開発されたものは少ない。個人向けも存在はするが、それらには飛行可能距離が短いという問題や、価格が非常に高いという問題がある。

そのような中、AIR社は、独自の技術を用いて長距離飛行を可能にする個人向けの「空飛ぶクルマ」を開発している。



今回、同社のCEOであるRani Plaut氏に取材を行った。

効率的な飛行技術の実用化を目指し、起業に至る

同社は、20年以上小型飛行機やドローンの製造、設計を行ってきたChen Rosen氏により2017年に設立された。設立当初は、より効率的に長時間飛行を可能にする飛行制御システムの研究をしていて、その後その技術の実用化を目指して現CEOであるPlaut氏が参画した。

Plaut氏は物理学をバックグラウンドにもつシリアルアントレプレナー（連続起業家）であり、世界中の自動車や航空機メーカーに部品や機器を提供する企業などでCEOを勤めた経験を持つ。

デザインや操作の「シンプルさ」が強み

同社が開発中の製品は、可動部品数が最小限に抑えられており、デザインが非常にシンプルであるという特徴がある。これにより、工場での大量生産が可能になるだけでなく、比較的低い価格（20万ドル以下）で販売することができる。デザインは非常にシンプルであるにも関わらず、機能は優れており、飛行可能距離は100km以上に及ぶ。

また、同社の製品に搭載されたソフトウェアは、危機を察知して自動的に停止するなど、操縦をサポートする機能を有しており、プロのパイロットでなくても安全に操縦することができる。



(AIR社が開発中の製品)

まずは「クルマが空を飛ぶ」というパラダイムシフトを引き起こす

「空飛ぶクルマ」の実現を目指す上では、技術的問題や法的問題など様々な障壁があるが、「人がクルマで空を飛ぶことができるという事実を受け入れる」ことが、これらの障壁を乗り越える上で最も重要なものだと Plaut 氏は語る。そのため、まずは人が住む都市の上空を飛行するための製品ではなく、ベイエリアから島へと移動するなど、人が住まない地域の上空を飛行するための製品の販売を同社は目指している。

同社の製品は、2021 年秋に販売開始される予定だ。



Rani Plaut 氏

CEO から日本企業に向けたメッセージ

日本の市場は非常に革新的であり、「空飛ぶクルマ」のような革新的な製品への需要が高いのではないのでしょうか。

飛行に関する規制の面で障壁が低いのであれば、当社は喜んで日本市場に参入したいと考えています。